



一歩ふみ出してみることもうひとつの思いにたどり着くこと

副校長 家本 咲子

入学・進級してから1ヶ月が経とうとしています。

子どもたちの「良くなろうとする姿」を見ることができるのは、私にとって年度初めの楽しみの1つです。その姿を、保てるように私たちにできることを考えていこうと気持ちを新たにすることが、5月の初めです。

今年の4月は、6年生に国語の授業をする機会をもらいました。子どもたちと共に学んだのは物語「帰り道」。主人公は律と周也という2人の男の子です。学校からの短い帰り道の中で互いの思いがすれ違ったり、届かなかったりしながら歩き続けるのですが、ある出来事をきっかけにそれぞれに足りていなかった力を得て、その力に助けられ分かり合うことができる物語です。物語は、律視点と周也視点の2部構成に分かれています。同じ場面でも2人の気持ちや捉え方が異なっているけれど、でも、お互い分かり合いたいという切なる思いがある。このすれ違いが、読み手である私たちだけには伝わり、なんとも言えないもどかしさを抱きながら読み進めました。

学習を終えた子どもたちの感想には、それぞれの視点で学びから得たことが述べられていました。

みんな個性があるから、個性を尊重して人間関係を続けていきたい。

相手の思いがわからない時は視点を替えて相手の思いを探ってみるといい。人間関係の悩みを解決するヒントをもらった。

視点を替えると、もうひとつの思いにたどり着くことができる。

視点の違いによって、同じ出来事でも見え方は違う。相手の立場になって考えることが大切だ。

相手の本当の気持ちは聞いてみないと、言葉にしないとわからない。

すれちがいが多い世界だから、あきらめるのではなく、一歩ふみ出してみるという。

1つの物語から自分の人間関係に思いを馳せたり、視点を替えて物事を捉えたいと今後の生き方のヒントを見つけたりと、子どもたちなりに学びがあったのではないかと感じました。

子どもたちとの学びを通して、すれ違いの多い世界の中で「あきらめるのではなく一歩ふみ出し」、視点を替えて物事を捉え「もうひとつの思いにたどり着く」ことをこの1年間大切にしていこうと心に決めました。子どもたちの「良くなろうとする姿」を保つためには、大人の思い込みや価値観のみで判断せず、子どもの中の「もうひとつの思い」を探ることが大切なのではないか、そうすることで、子どもたちは大人に「分かってもらえた」という安心の中で成長することができるのかもしれないね。安心感の中で子どもたちが伝えたいことをきちんと言葉にできる環境を整えていきたいと思っています。

5月が始まります。子どもたちにとって前向きに明るい5月になるよう教職員一同、力と心を合わせて教育活動を進めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。